

漫画文化における同人誌の系譜

新井 麻衣子

私は「同人誌」や「同人誌即売会」に触れる機会を持ち、多様な表現、斬新なアイデアが、バーコードのない本の中に溢れていることを知った。商業マンガやアニメなどを山と例えるなら、同人誌はその山を支える、山の下に広がる裾野ではないか、と思ったことから、今回の卒業論文のテーマとして選ぶことにした。

同人誌の起源、と言える文芸同人誌の歴史は明治まで遡る。マンガは大正期に入って隆盛に向かった新しい表現だったが、明治末期には既に漫画の勉強を始める人も出始めていた。マンガという新たな表現を得て、手塚治虫、赤塚不二夫、さいとう・たかをなど、多くの作家が生まれた。

1975年に第一回コミックマーケット（C1）が開催され、30年以上経過した現在でもその歴史は続いている。コミックマーケットと一口に言っても、マンガ以外にもあらゆるジャンルのアマチュア制作作品を対象としており、漫画・アニメ・ゲーム以外の大衆音楽・アイドルグループのファン同人誌の販売、コスプレ衣装やコスプレ衣装、手作りアクセサリーの販売、同人ハードウェア、人形作家による人形の販売、教師・看護師・航空機パイロット・鉄道員等の一般に知られない職業従事者の日常が描かれたもの、またペット・ガーデニング・紅茶などの愛好家による同人誌まで、現代日本のサブカルチャーが一堂に集う場となっている。最近では電車男などのドラマによって注目が集まり、比較的一般にも知られるイベントになった。コミックマーケットは、法に反しない限りほぼ無制限な、巨大な「表現の自由」の場としても貴重な存在である。

今日の同人誌はパロディの他、商業誌が商業利益追求のために切り捨てた部分を補う役目を果たすようになっている。連載の打ち切りや、掲載誌が廃刊となった場合に、作家が自己の作品の続きを同人誌で発表したり、単行本化されない作品を同人誌で発行するという形も見られる。これは同人誌が非営利であり、出版社が同人誌の著作権侵害を黙認することから可能となっていることである。

また、コミックマーケットが行われる中で、特に初期の頃には高橋留美子など現在のマンガ界を牽引していくような存在がアマチュアとして参加していたこと、また高河ゆんやCLAMPもコミックマーケットという場から輩出された。現在では、アマチュア作家がコミックマーケットへ参加する中で商業誌の編集部に見出されてプロデビューを果たすことも、また職業漫画家となった者が個人でコミックマーケットに参加することもある。アマチュアとプロの境は年を追う毎に曖昧なものになっていっている。こういった面もあることが、現在のマンガやアニメの文化や産業を培う土壌は、豊かさを保っているのだろう。